

### 3. 縄文時代中期末葉から後期初頭の土器の編年について

第V章で述べたように、当遺跡からは縄文時代早期から後期にいたる多様な土器が約40,000点出土しているが、このなかで大部分を占めるのは、中期末葉から後期初頭にかけての資料である。

当遺跡のある胆振地方は、広い意味で道南、すなわち北海道の南部に含めることができるが、現在、北海道の南部～中央部における、中期末葉から後期初頭の土器の編年については、次の三つを代表的な見解としてあげることができる。

①高橋正勝氏に代表される編年（高橋正勝 1981）

余市式土器群の変遷を伊達山式<sup>註1</sup>→静狩式・入江Ⅲ類→煉瓦台式→ノダップⅡ式という順序でとらえるもの。

②大沼忠春氏らの編年（大沼忠春 1981）

	道 南	道 央
中期	ノダップⅡ式 煉瓦台式・静狩式	(+) (+)
後期	天祐寺式	余市式

③大島直行・瀬川拓郎両氏の編年（大島直行・瀬川拓郎編 1982）

短刻線文土器群、余市式土器群、北筒式土器群の3種が存在し、これらのうち、短刻線文土器群は大木系土器に、また、余市式土器群はトコロ6類系土器に、それぞれ類縁・影響関係をもつとするもの。

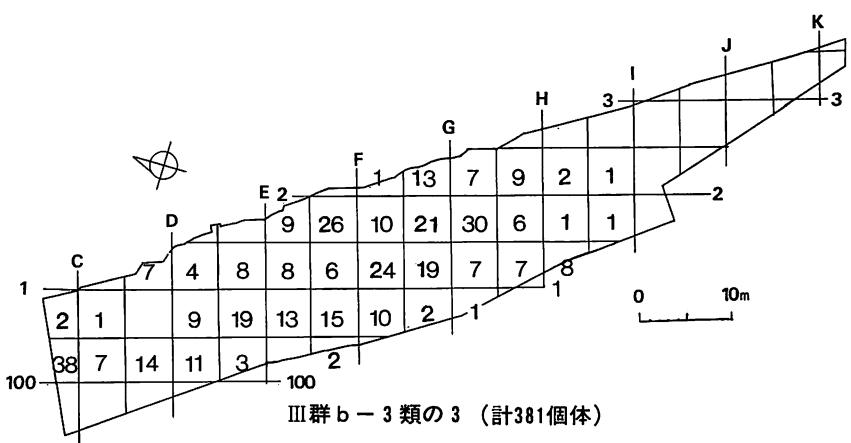
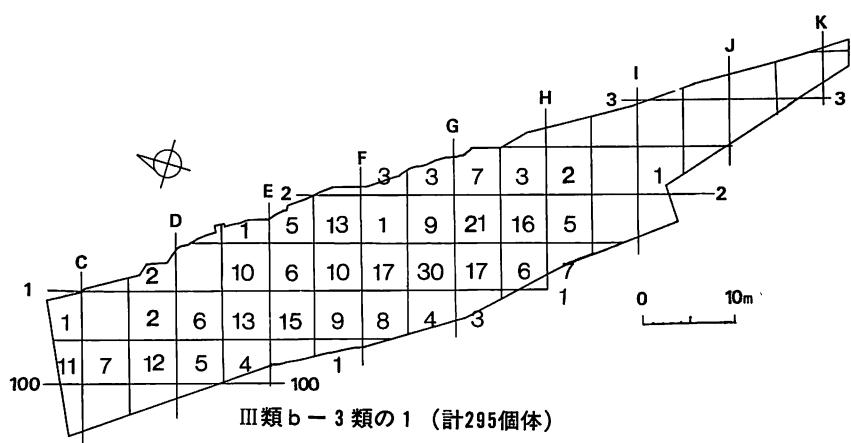
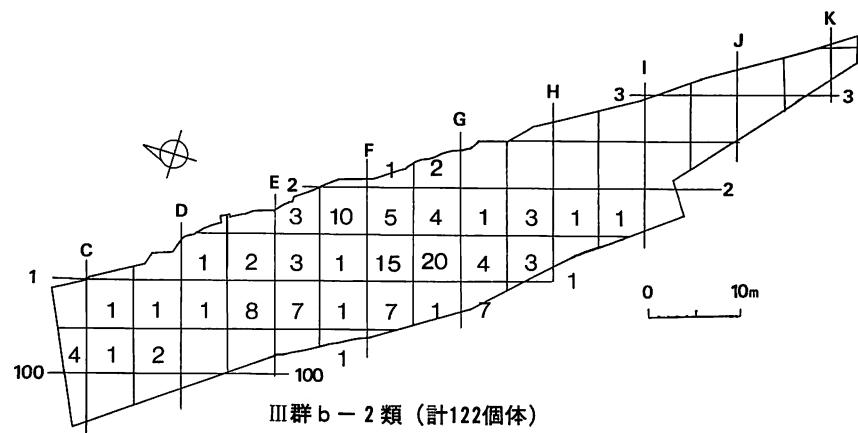
①と②にみられる差異の一つは、余市式をいくつかの型式から構成される型式群とみるか、否かということである。また、ノダップⅡ式、煉瓦台式、静狩式などという型式名の意味する内容が研究者によって異なっている点も注意すべきだろう。<sup>註4</sup>なお、最近、鷹野光行氏や宮夫靖夫氏によっても高橋氏の見解を支持する論考が発表されている（鷹野光行 1984、佐藤一夫・宮夫靖夫編 1984）が、前記の型式名によって示された内容はそれぞれ独自のものである。

一方、③は、従来の諸型式では型式内容の吟味に不充分な点があることを指し、製作手法・器形・器種構成に着目して分類を行っている。そして、その結果、短刻線文土器群と余市式土器群を異系統としているが、この考え方も各型式の間に時期差を想定する①、②とは大きく異っているといえよう。

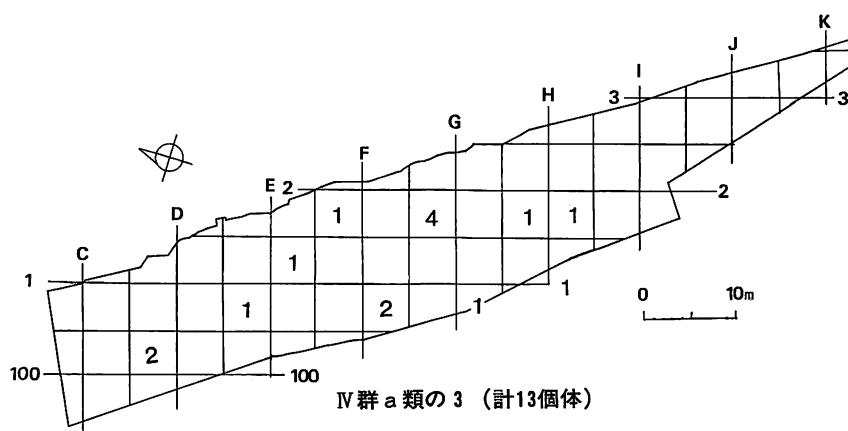
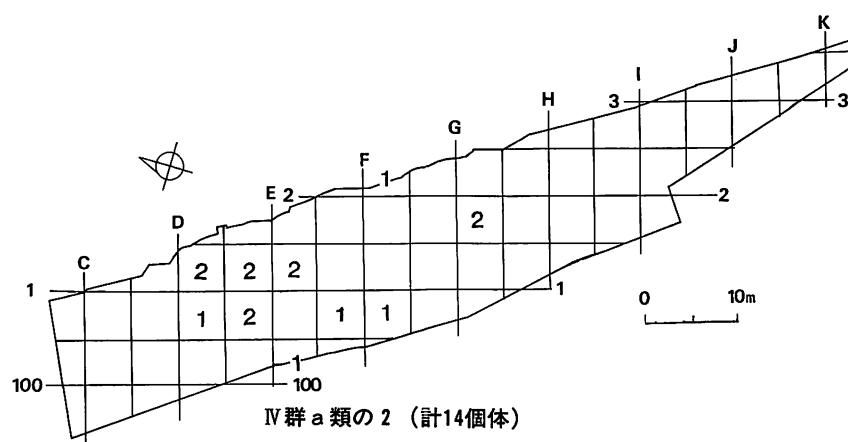
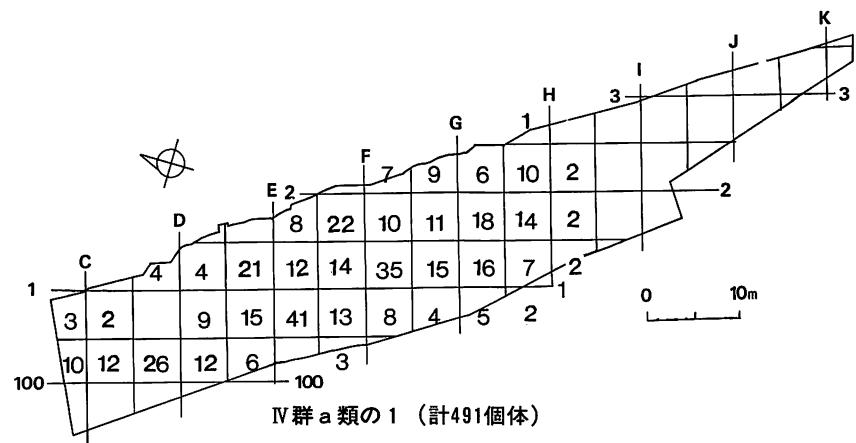
このように見解がわかった原因のひとつには、各型式の層位的上下関係に関する資料の蓄積が不足している点をあげることができる。

今回の調査にあたっては、以上の状況をふまえて中期末葉から後期初頭にかけての編年を再検討するための資料を得ることを一つの課題とした。

前述したように、登別市千歳6遺跡の調査をもとになされた大島・瀬川両氏の分類は、製作手法・器形・器種構成に着目しているが、これは、器形・文様要素の組み合わせによって行わ



図VI-3-1 土器の分布図(1)



図VI-3-2 土器の分布図(2)

れていたこの時期の分類に新たな視点を導入したものとして評価することができると思われる。

また、当遺跡と千歳6遺跡は距離にして1km足らずであり、出土した土器も類似したものが多いことから、本報告書ではこの考えにしたがって土器の分類を行い、当センターの分類基準のうち、Ⅲ群b-3類とⅣ群a類を細分した。

#### 対照表

Ⅲ群b-3類の1：トコロ6類に相当するもの

Ⅲ群b-3類の2：大木系の土器

Ⅲ群b-3類の3：函館市西股遺跡の第Ⅱ文化層、山越郡長万部静狩遺跡、函館市煉瓦台遺跡、登別市千歳6遺跡などから出土し、それぞれノダップⅡ式、静狩式、煉瓦台式、短刻線文土器群(Ⅲ2a群土器)などと称されているものに類似した土器

IV群a類の1：余市式土器に属するもの

IV群a類の2：虻田郡虻田町入江貝塚出土のⅢ群Ⅱa・Ⅱb土器の一部、上磯郡知内町涌元遺跡出土の土器、茅部郡森町鳥崎遺跡出土の第4群・第5群土器、爾志郡乙部町元和遺跡群出土のF群土器に類似したもの

IV群a類の3：トリサキ式土器～大津式土器に相当するもの

当遺跡から出土したIV群a類の1は、器面の凹凸や貼付帯の形状などⅢ群b-3類の3に比べて成形・調整が一般に粗雑であるが、後者の中にもP-84出土の深鉢(図VI-3-3-1)など粗雑なものが存在し、両者の差異はそれほどきわだったものとしてとらえることができなかった。

Ⅲ群b-3類の3の縄文は、原体を横方向に回転したものが多数を占めているが、縦方向に回転したものもあった。一方、IV群a類の1では、横方向の回転によるものと縦方向の回転によるものがともにみとめられた。また、貼付帶上に縄文を施文する場合、Ⅲ群b-3類の3では粘土紐を貼り付けてから行っているが、IV群a類の1では一般に地文の縄文を施してから貼り付けを行い、貼付帶上に地文とは別に縄文を施している。

器形については、全体像のわかるものが少ないが、どちらも胴部が直線的に立ちあがるもの、いったん屈曲後、外反する口縁に続くもの、胴部にふくらみをもつものがある。

Ⅲ群b-3類の3にはみられるが、IV群a類の1にはみられない文様要素には、短刻線文と縄線文がある。ただし、縄線文に関しては、IV群a類の2の編年的な位置づけともからんで問題があるといえよう。<sup>註5</sup>

反対に、IV群a類の1にあってⅢ群b-3類の3にない文様要素には、縦方向の貼付帯があげられる。

千歳6遺跡では、短刻線文土器群と余市式土器群をそれぞれ異系統のものととらえているが、後者の資料数が前者のそれに比べて極端に少ない点は注意しなければならない。当遺跡の資料からみれば、IV群a類の1の製作技法は、Ⅲ群b-3類の3の製作技法を簡略化したものと考え

ることも可能なのではないだろうか。

図VI-3-1～2は、縄文時代中期中葉から後期前葉にかけての土器の平面的分布状況を口縁部破片によって識別した個体数でグリッドごとに表わしたものである。

おおまかな傾向としては、調査区域の中央部に分布が濃く、南北両端は包含層そのものが削平されるなどして薄いこともある出土数が少ない点を指摘することができる。これは、谷底の平坦地という、遺跡の立地条件によるものであると思われる。

図でみると、Ⅲ群b-3類の1・3とⅣ群a類の1はほぼ同じ分布を示し、住居跡の存在するグリッドから多く出土している。Ⅲ群b-2類の土器の分布もこれらに似ているが、F-1-a, bに集中がみとめられる点が異なっている。Ⅳ群a類の2は、D-100からD-1にかけてややまとまりがみられる。Ⅳ群a類の3は、発掘区中に散在している。

発掘面積が少ないこともある、土器の分布状況からは、Ⅲ群b-3類の1～3、Ⅳ群a類の1の相互関係をつかむことができなかったが、遺構から検出された資料についてはどうだろうか。H-27, H-29, P-84から出土した土器について、他の遺跡の資料と比較しながら次に述べてみたい（図VI-3-3参照）。

遺構の項で述べたように、H-27, H-29, P-84はほぼ同じ場所に構築され、その新旧関係は、古い方から順にP-84, H-29, H-27となっている。

P-84の覆土から出土した土器にはⅢ群b-2類、Ⅲ群b-3類の3、Ⅳ群a類の1がある。H-29からは土器が検出されていない。H-27の石組炉周辺からは、Ⅳ群a類の1の深鉢が検出されている。この深鉢は貼付帯の間に無文部を有するが、P-84から検出されたⅣ群a類の1の中にはこのようなものはみられない。また、H-27とP-84は掘りこみ面が異なっている。これらのことから、少なくともⅣ群a類の1のうち貼付帯の間に無文帯を有するもの（図VI-3-3-3）は、P-84出土の遺物（図VI-3-3-1, 2など）よりも時期が新しいということになろう。

では、本報告書でⅢ群b-3類の1～3としたものの関係はどのように考えられるだろうか。

P-84から出土した土器のうち、図VI-3-3-1に類似した土器は、山越郡八雲町栄浜1遺跡A地点の17号住居址床面からも検出されている（八雲町教育委員会編 1983）（図VI-3-3-4）。同住居址からはこのほかに数点の土器が出土しているが<sup>註7</sup>、その中で無文部と縄文の間に縄線文が施された大木系の土器（図VI-3-3-6）と類似したもの（図VI-3-3-10）は、登別市千歳4遺跡5号住居跡よりトコロ6類相当の土器2点（図VI-3-3-9, 11）とほぼ同じレベルで検出されている（財団法人 北海道埋蔵文化財センター編 1981）のである。

当遺跡・栄浜1遺跡・千歳4遺跡の資料を比較した場合、図VI-3-3-6, 10を媒介として、1・4と9・11も併行関係にあることが考えられるのではないだろうか。

ところで、千歳4遺跡5号住居跡では、前述した土器3点より約10cm高いところから静狩式土器（図VI-3-3-12）が検出され、報告者は焼土が2層に分かれる点に一考を有するとしながらも、以上の土器四点を共伴関係にあるものととらえている。鷹野光行氏はこのとらえ方

を批判して、むしろ、トコロ 6 類相当の土器・最花式土器と静狩式土器の間に新旧関係があることを示すとしている（鷹野光行 1984年）。確かにこれら 4 点の土器を共伴ととらえるのはやや無理があろう。しかし、1・4 と 12 は同じ型式のものと考えることができるので、鷹野氏のよう<sup>註9</sup>に 12 と 9～11 の間に新旧関係を指摘することには問題があるのではなかろうか。

当遺跡内の切り合い関係にある遺構のうち、H-27、H-29、P-84 の出土遺物について他の遺跡から得られた資料と比較しながら考察を行ったところ、Ⅲ群 b-3 類の 1～3 は併行関係にある可能性が少くないという結果が得られた。これは、冒頭にあげた中期末葉から後期初頭の編年に関する三つの見解のうち、大沼忠春氏らの説に近いものであるが、大沼氏のいうノダップⅡ式と図版 V-1-8 に示したⅢ群 b-3 類の 3 の一部との関係については、資料不足もあってはっきりした関係をつかむことはできなかった。

Ⅲ群 b-3 類とⅣ群 a 類の系譜関係については、Ⅳ群 a 類の 1 の製作技法がⅢ群 b-3 類の 3 のそれを簡略化したとも考えられるものの、Ⅲ群 b-3 類の 1 との関係、Ⅳ群 a 類の 2 の位置づけなどを含めて、さらに資料を蓄積することが望まれる。（中田裕香）

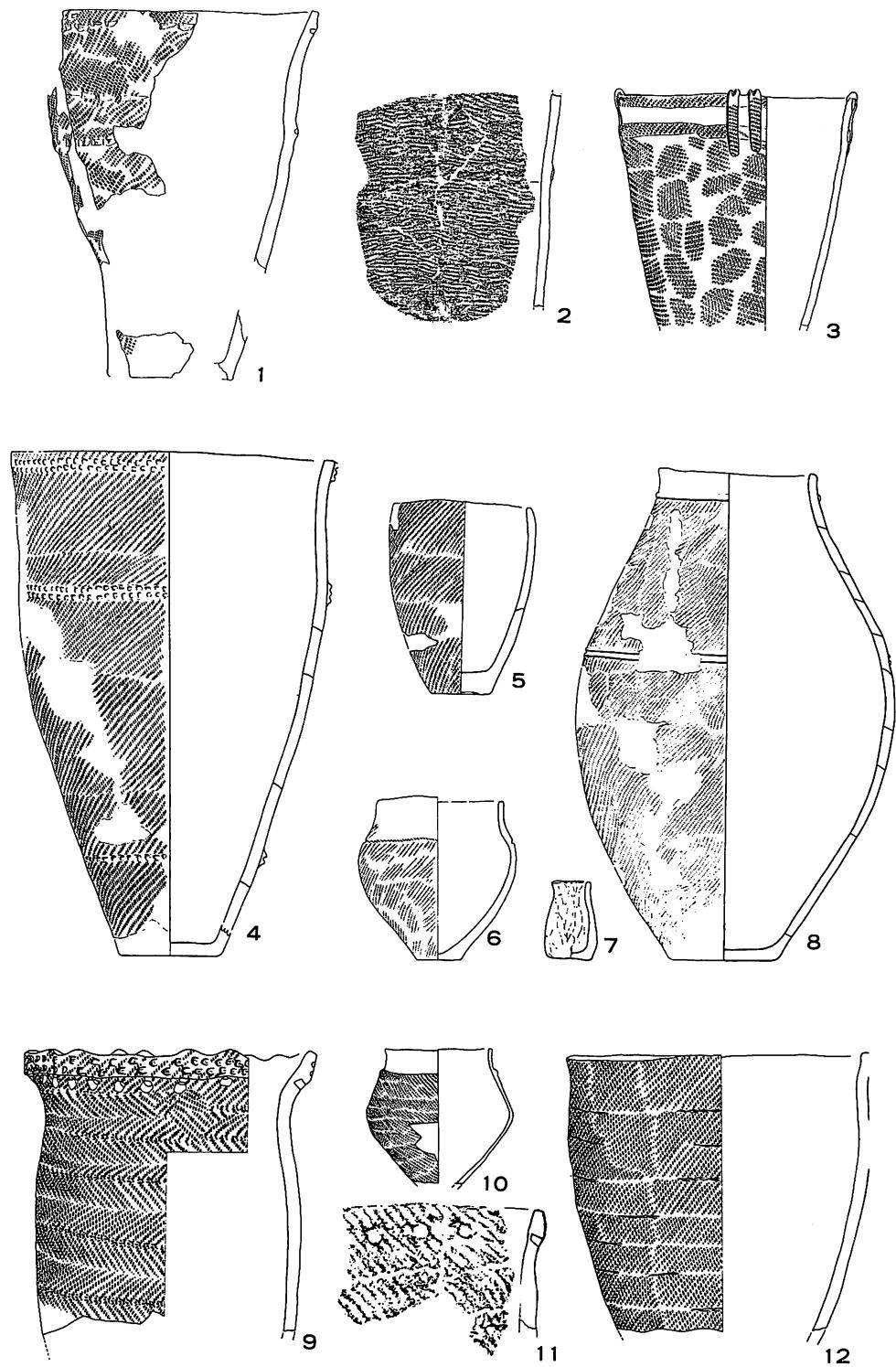
#### 註

- 1 高橋氏は、1976年に発表した縄文文化前・中期の編年表の中で、道南の見晴町式と道央の伊達山式を併行関係においている（高橋正勝・小笠原忠久 1976）が、1981年の論考ではこれらの関係についてははっきり述べられていない。
- 2 大沼氏は、伊達市南稀府 5 遺跡の報告書では、「ほぼノダップⅡ式に相当する位置に北筒式の一群が存在する」ものと考えている。ただし、柏木川式とノダップⅡ式の区別は必ずしも明確ではないようである（北海道文化財保護協会 1983）。
- 3 報文の一部では「余市式土器」という用語も使われているが、両者はほぼ同じ内容を示すと思われる。
- 4 森田知忠氏は大沼氏の編年を引用した際に「レンガ台式」と記述している（森田知忠 1981）が、誤解を生む記述の仕方であろう。
- 5 Ⅳ群 a 類の 2 は、涌元式（千代肇 1972）との関係も考慮すべきだろう。
- 6 千歳 6 遺跡の報告者は、余市式土器群を伴う明確な居住遺構が検出されていないことから、出土した余市式土器群が本来のセットのうちすべての器種を満たしていたかどうか疑問が残るとしている（大島直行・瀬川拓郎編 1982）。
- 7 栄浜 1 遺跡の報告書の本文では、図 VI-3-3-7、8 の土器は床面直上から出土したと記述されているが、同書第31図の説明では、図 VI-3-3-4～8 が床面から出土したと書かれている（八雲町教育委員会編 1983）。
- 8 報告書では最花式に近似するものとされている（財団法人 北海道埋蔵文化財センター編 1981）。
- 9 前述した鷹野氏の編年の中で、煉瓦台式と静狩式は同じ時期（大谷地第4期）のものとされている（鷹野光行 1984）。

#### 参考文献

- 大島直行・瀬川拓郎編『札内台地の縄文時代集落址 北海道登別市千歳 6 遺跡発掘調査報告書』（1982年）
- 大沼忠春「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」（『考古学雑誌』第66巻第4号、1981年）

- 財団法人 北海道埋蔵文化財センター編『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡——北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財調査報告書——』(『助北海道埋蔵文化財センター調査報告』第1集, 1981年)
- 佐藤一夫・宮夫靖夫編 『タブコブ——北海道苫小牧市植苗地区国道36号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——』(1984年)
- 鷹野光行 「縄文時代後半期」(『北海道考古学』第20輯, 1984年)
- 高橋正勝・小笠原忠久 「縄文時代前期・中期」(『北海道史研究』第10号, 1976年)
- 高橋正勝 「北海道南部の土器」(加藤晋平・小林達雄・藤本強編 『縄文文化の研究』第4卷 縄文土器Ⅱ, 1981年)
- 千代肇 『涌元遺跡』(1972年)
- 北海道文化財保護協会 『南稀府5遺跡——北海道立伊達緑丘高等学校建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——』(1983年)
- 森田知忠 「北海道」(野口義磨編 『縄文土器大成』3——後期, 1981年)
- 八雲町教育委員会編 『栄浜——八雲町栄浜1遺跡発掘調査報告書——』(1983年)



図VI-3-3 千歳5遺跡の土器と栄浜1遺跡・千歳4遺跡の土器  
(1~3 千歳5遺跡, 4~8 栄浜1遺跡, 9~12 千歳4遺跡)